
漆黒蝶—ブラックバタフライ—

Solitude

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漆黒蝶―ブラックバタフライ―

【Nコード】

N9528H

【作者名】

S o l i t u d e

【あらすじ】

威勢のいい村長の息子、『ロキ』は強い正義感のため、村を守るために盗賊のアジトに潜入します。ところが、それが仇となり……不思議な力を持つ青年と、その周りを取り巻く物語は、やがて世界へと広がります。

序章&第一章・盗賊退治（前書き）

前書き。

更新は週一ペースで。一応、構想は練ってあるのでネタ詰まりは無いと思いますが、いろいろ大変な時期だったりしますので、時折遅れるかも知れません（汗）

どうかお許しを……

あ、ブラバタって略してくれるとありがたいですw
ブラックバタフライ

←← ←←

ブラ バタってことでよろしく願います！

序章&第一章・盗賊退治

2 序章

世の中は、混沌としていた。まさに、黒の時代であった。そんな時代に、水を得た魚のように現れたのが、魔王である。人々は、魔王と呼ぶのを避け、こう、異名をつけた【闇を得た蝶、漆黒蝶】と。漆黒蝶は、数々の地域を占領し、まるで世界を手玉に取るような、そんな風に、漆黒蝶は世界を侵略していったのである。

3 盗賊退治

小さな村が、あった。そのころは、そこが世界のどの位置にあるかすらわかっていなかったが、本能的に、彼らは自分らの村を小さいと認識していた。そんな村をどうして盗賊が襲うのか、それを知っていたのは、ナット村、二十七代目村長、アルバートのみであった。「ふう」

村長のため息が漏れる。

「村の若者は、殆ど殺されてしまった……あと残るは……フー、グリン、リック」

「あと、俺が居る」

二階から下ってきた、青年が言った。

「なあ、親父。そろそろ、俺も自立しなきゃなんねえ。そのための第一歩として、俺に、盗賊退治を任せてくれよ」

「……。馬鹿なことを言うものではない。お前は、二十八代目村長だぞ！」

「何かあったとき、村人任せにしなきゃなんねえ様な、お前みたいなヘボ村長にはなりたくないんだ！」

「何だと、ロキ！ ふざけたことを言ってるんじゃないぞ！」

「ふざけてんのはお前だろ、クソ親父！ 戦わなければ、明日は無い。そういつてたのは親父だろ？」

……二十七代目村長の息子ロキは、青春真っ只中とは言え、多少、過度に親に反抗するところがあった。昔からチャホヤされていたので、付け上がっていたのかもしれない。だが、彼は、正義感に溢れる、最高の村長になれる器であった。

「はぁ……」

何で、俺が怒られなくちゃなんねえんだ！俺はみんなの気持ちを代弁しただけだ。心の叫びは虚しくも、自らの心の中で反響し、胸が疼いた。

「こうなったら、死んでも、盗賊を倒してやる」

そう言って、向かった先は、ナット名物【ベンの武器屋】であった。

「おい！ベン。いい武器あるか？」

「おお。アルバの息子さんじゃないか。何、武器ならたくさんあるよ。学校で使うのかい？」

「お、おう。できればカッコイイ剣がいいんだけどな」

「……ちよっと待ってろよ」

「ふう」

ロキは思わずため息を漏らした。ベンさんと、親父は親友だ。さっきのことを、親父に言うかもしれない。そうすると、任務は、早く遂行しないとな。

ロキは一人で、仕事人ごっこをしていた。さびしいものである。

「おう。お待たせ！これなんかどうだ？短いがなかなかの切れ味だ。素人が、太刀振り回すよりか、百倍使えるぜ」

「ダガー（短剣）か……。一番強い武器を参考に見せてくれよ」

「ふ、自信家だね。ウチで一番強い剣は、君の身長よりでかいよ、それでも見るかい？」

「……え」

思わず声が漏れた。

「ま、ほかならぬ、アルバの息子さんの頼みなら、しゃあねえ。聞いてやるよ。少し待ってろ……いまその武器庫から……」

「まった！いいから、この剣、いくらだ？」

「え、いいのかい？ ま、いいっていうんなら、とめないけどな。そのダガーはタダだ」

「タダ？ そ、そりゃいくらなんでも……」

「……言いたくは無かったが。俺は気づいてるぜ。がんばってくれよ。この村の復活のためにな」

「え！ あの……親父には……」

「わかってるさ。俺も男だ。お前の決しんの硬さはわかってるぜ」

「サ、サンキュー。必ずこの村を変えて見せるぜ！」

「ああ。期待しているぜ！」

強い味方が増えた。今日の深夜。アジトに乗り込もう。そこで、そこで、アイツらの仇を討つんだ！

――深夜

静々と、時計の音が鳴り響き、いかにも“でそう”な時間。ロキは、ひそかに、身震いしていた。

「こ、こんなに恐ろしいとはな。しかも外は寒いし……」

「グォ……グガァー！」

怪獣と化した自分の父親に、つばを吐きながら、ロキは外に出た。

「おお、予想通りサミィ」

「ロキ君。待ってたよ」

「ベンさん！」

冬の夜に、ベンは身震いした。

「さあ。これをもっていきな。これはな、昔、俺と、アルバで冒険したときに使ったよろいだ。これを背負えば、百人力だ」

お世辞にも素晴らしい防具とは言えなかったが、涙がでてきた。

「じゃ、ベンさん。行ってきますす！」

「おう。無事で帰ってこいよ」

「はい」

笑顔で、駆けていった、ロキを見て、ベンは懐かしい、思い出を思い出していた。

村の中は、囲いがあるので、魔物は入ってこないものの、外は、魔物の巣窟だった。見渡す限りのゴブリン（子鬼）や、スライムがこちらに向かってくる。そのたび、ロキは【少年館、生きる魔物事典】を広げ、弱点などを、突き、戦っていた。

「わ！ また来た」

これじゃあ、一步も進めないよ、とロキは、うなだれた。

「えー何々？ スライム（亜）カーペットに張り付いた、玩具の呪いがこもった、魔物。弱点は、なし」

「……なんじゃこりゃ」

そんな感じで、一人漫才をやっているときも、スライム（亜）近づいてくる。

「クソ。こうなったら、テキトーに剣を振り回すしかねえ」

ブウン、ブウン。短剣なのに、短い剣すら、うまく扱えないロキの剣は空を切る。

「ハア、ハア」

次第に疲れてくるロキ。戦わなければ、明日は無い。父親の言葉が、頭をよぎる。

「オレは、弱虫になりたくねえ！」

魂をこめた、一振りは、スライムの体を真っ二つにした。が、スライムは、二匹に増えたのみで、なおも、せめて来る。心臓は？ ひよつとして、臓物や血管すらないのか？

「く、やむをないか……」

一度は逃げることも考えた。だが、それでは格好がつかない。ロキはスライム（亜）を握ると、そのまま遠くへ、投げ飛ばした。勝ち目が無い、と考えたのだった。

ロキは、北上した。さすがに、スライム（亜）は珍しかったらしく、二度は出てこなかったし、普通のスライムは、きただけで、倒れた。ゴブリン、大グモもたいしたことは無いように感じた。そして

ついに、たどり着いた。盗賊のアジトへと。

「ここか……」

いや、まだアジトとはわからない。単なる洞穴だ。だが、ロキには確信があった。ロキは慎重に洞穴の外を調査した。その結果、左のことがわかった。

- ・ 洞穴の入り口に階段や、脚立はない
- ・ 周りに落とし穴などの、警戒措置がされていない
- ・ どうやら、数分前に、大きな男と、子供が出入りしたらしい

結局、これらのことからは何も得られなかったが、とりあえず、入るのを躊躇した。洞穴の深さがわからないからだ。万が一にも飛び降り自殺まがいのことにはなりたくない。ロキは、考えた。

「……！」

閃いた！ というような顔をしてみたものの、何も閃かない。なんだかんだで、かなり時間がかかっているな。ロキに、残された選択肢はただひとつだった。

——思い切って飛び降りる。

「時間が無い。急がなきゃ！」

決めるのは覚悟。格好は決まなくていい。死をも恐れぬ覚悟を……。

「十、九、八、七、六……」

自分で自分を追い込む。それしか、方法はないと、ロキは、考えたのだ。

「二、一、零！」

覚悟は、薄っぺらだった。どうやって飛び降りたか？ それは『ノリ』だ。いや、やはり、『格好』かもしれぬ。自分は、カッコワルイ親父みたいになりたくない。という、気が、一步を歩ませたのであろうそんなことを、ロキ自身で考えていた。やがて、その理論的な思考は、恐怖に変わった。滞空時間が、長すぎるのだ。

「これで、俺もお陀仏か……」

なおも、堕ちる堕ちる……地獄のそこにつくのでは？　　と思ったとき、下に、明かりが見えた。

「……横？」

明かりは、筒状の、洞穴のかべから出ていた。つまり、堕ちるままでは、死ぬ。途中で、なんらかの方法をつかって、横にそれなければならぬのだ。

「考えてる間は無い。賭けだ！」

そういうと、ロキは思い切り体をよじらせた。そして、だんだんと、右側による……。ズズズズ……。よいが、壁にぶつかってすれる。幸い、ベンさんのくれたよろいのおかげで痛くない。あと、一メートルほど。生死はそこで、わかれる。

「こ、怖い。怖いよ……怖いよ、オヤジ……」

初めて恐怖を感じた。死にたくない。死にたくない。

ついに明かりの原まで、来た。ここで思いっきり、飛び込む……！

「のおおおお」

はい。作戦失敗です。はい。膝は震える。もうだめだ、と思ったとき、閃いた。

「ダガーだ！」

ロキは、ダガーを手に取り、壁に突き刺した。

「ふう。これで一安心」

と、思いきや……ポキという、音がして、柄の部分が完全に切断された。またも急降下。もうだめだ、本当にもうだめだ。そう思ったとき、ロキの体は、緑色のオーラのようなものに包まれた。

「あああああ！」

力が……湧いてくる。これなら——いける！　ロキは、壁の小さな小岩をつかみ、まるでロッククライミングのように、壁を登った。そして、ついに明かりの源へ。

「ふう」

堕ちているときより、むしろ、今のが怖い。怖い。コツコツという

足音を気にせず、俺は進んだ。奥の部屋には、三人の盗賊がいた。鈍い、盗賊たちは、俺が、近づくまで、気づかなかったが、俺が近づくと

「だれでい？」

と大声を上げた。

「ロキだ。ナットを襲う理由を教えてもらおうか？」

「……おれあただ、ロデス様に……」

「ロデス……？ 誰だ、それは？」

「言えネエな」

「ならば戦うのみ！」

ロキは、自分でも信じられないようなほど、威勢のいいこえで言った。

「アラアアア！」

盗賊は、棍をもって戦ってきた。そこで、ロキはダガーを……

「あら？」

ロキが持っていたのは、ダガーの“柄”であった。

「ヤベエ……」

「ヘヘッ！ どうやら、御仕舞いみたいだなあ！」

巨大な棍で、顔を幾度も殴られる。そのたびに、意識が遠のく。

「グハッ！」

痛い。だが、その痛みが徐々に力に変わっていくような気がした。

「あああああ！」

「な、何だこいつ！」

「ボ、ボス！ こんな緑色の人間、おっかなくて相手にできないですぜ」

「うるせえ！ お前みてえな弱虫、どうでもいいんだ、早く“ヤツ”を見張りに行け！」

「うす！」

「ほうら。ロキさん。早くかかって来い！」

「ああああああ！」

そう言うと、ロキは、ボスに向かっていった。その瞬間、ボスは、棍を振ったが、ロキがチョップすると、メシリと哀れな音をたて、折れた。

「キ、キサマ」

「ああああ！」

みぞおち一発、顔面二発。ボスは気絶した。その瞬間、ロキは、力が抜けて、バタリと倒れた。

「ロキ！ ロキ！」

「……」

「ロキ殿！」

「うう……」

視界が徐々に開ける。はじめに目に入ってきたのは……マー坊？

「ロキ殿。お気づかれましたか！」

「ああ、マー坊。どうしてここに？」

「いや、かたじけない。盗賊にさらわれてしもうて」

「……（いつものことだがこいつと話していると疲れる）」

「では、ロキ様は私のことを助けに……」

「あ、ああそうだよ。（あのまま奈落の底におっこちまえばよかったんだ）」

「では、早くここを出しよう」

「……どうやって出るの？」

「さあ……。そもそもここがどこであるかわからぬことには……」

「ああ、ざっと地下、百メートルらへんかな？」

「ああ、なら大丈夫です！ 私の忍術、『テレポート』を使えば……」

「ああ、そうか。助かったよ。『絶対忍術』じゃなくて、魔法だろ……」

「だが、残念なことに、このワザ、対象者が、一人なのであります」
「フアー……！」

「ですから、ここでお別れになります。さようなら」

「ああああ！」

マー坊が「テレポート」と唱えると、マー坊は消えた。

「あの、ク・ソ・ガ・キがああああ！」

小一時間、暴れまわった後、冷静さを取り戻したロキ。上からは、多少の光が確認できた。

「朝か……」

「もう一度、あの、『緑の』にならないかな……」

そして、冷静に考えたとき、ひとつの事実に行き着いた。

「さて、こうすればよかったんじゃないのか？」

1 マー坊が俺にテレポをかける

2 マー坊が、自分にテレポする

3 完璧！

俺は、「うがー」と大声を上げて地団駄を踏んだ。そのとき

「ロキ殿！ ロキ殿！」

「何だよ、クソガキが！」

「村が焼かれておりまする」

「何、詳しく説明しろ！」

「漆黒蝶軍の襲来にございます。ロープをたらしめますので、上ってきてください！」

「……えらい古式な」

三十秒ご、ロープがたれてきた。細身で、なんとも頼りない、限りなく糸に近い、ロープであったが、勇気をだして、上った。

「腕が、痛い」

だが、上った。親父、ベンさんが危険にさらされているかも知れないのだ。怖かった。だけど、俺しかないんだ。

やっと、上った。まず、目に入っただのは、遠くで炎上する、“何か

”だった。その何かが南の方角に無いことを祈ったが、羅針盤によると、南の西よりだった。

「あれが、俺らの村か？」

「……恐らくは、ですね。イルガスとかいう男が、仕切っております」

「漆黒蝶軍のイルガスか。絶対忘れネエ。行くぞ、マー坊！」

「はい！　といたいところではありますが、私、フロークに用があるので、失礼いたします」

そういうとマー坊は走って逃げた。

「あの、ク・ソ・ガ・キがああああ！（part2）」

だが、先ほどのように暴れまわっている間はない。ロキは駆け出した。途中、幾度か、ゴブリンや、スライムが攻めてきたが、無視して、進んだ。やっと村だ、と思ったとき、“ヤツ”が現れた。

「スライム（亜）……」

「ピーー！」

「……それ！」

再び、投げ飛ばした。そして、村に、どんどん近づく。アツイ。熱気が半端無い。

「クソッ！」

これじゃあ、入ろうにも入れないじゃないか！

「思い切って駆け込むか……」

「ああああ！」

ロキは駆けた。走った。ヤバイぐらい。自分が風になるぐらいに。そして、見た。燃え盛る、村、そして、漆黒蝶軍や、倒れる村人を。

「ん？　誰だ？」

「ロキだ……お前はイルガスだな？」

「ふん。インダレンド・ルーガ・ガソダム・スペシャルだ」

「……絶対偽名だから、イルガスで。イルガス！　何故村を襲う？」

「……さあ、戦って、勝ったら教えてやるよ」

「ならば剣を抜け！」

「……」

イルガスは剣を抜いた。そして

「お前ら、手を出すなよ？ 俺の獲物だ」

と二十人ほどの、仲間に言った。

「では、勝負」

互いの剣が交わう。それを何度か繰り返す。

「……ハァ！」

イルガスは、後ろに退いた。そして

「……やめろ。何れ、キサマとは戦うことになる。では」

「お、おい、逃げるのか？」

「いや。あともう一つ。ナットの書はいただいたぞ。貴様にこの意味がわかるかな？」

「……ナットの書？」

ロキの頭の中で、ひとつの光景が、ループした。

——何年前

「お父さん！」

「おお、ロキか」

「今、しまったのは何？」

「ああ、これか？」

そういうと、親父は、一つの本のようなものを取り出した。

「なあに？ これ」

「これはな、ナットの書と言うんだ。ロキにも、この意味がわかる日が来るはずだ」

「……今は、わからぬ。だが、時期にわかるはずだ。ナットの書の意味が」

「そうか。では、また会おう、お坊ちゃまのロキ様」

そういうと、イルガスは、意地悪い笑いをあげた。イルガスが完全に去ったことを確認すると、ロキは、自分の家へ走った。

「親父！ 親父！」

「おお、ロキか」

命からがらという感じであった。父はもはや、死を待つしかないようなやけどを負っていた。

「ロキ、ナットの書は……無事か？」

「――！」

それほどまでに大切なものだったのか、ナットの書は。俺は正直に言なかった。

「無事だよ。ところで、あのナットの書ってなんなんだ？」

「ナットの書は……古……巨人が……復活の……儀式」

空白がありすぎて、意味がわからない……だが、必ずや、イルガスから、ナットの書を奪い返してやるぜ。

「オヤジ……すまなかった。盗賊は倒した……だから、生きてくれよ！」

「ああ、見えない。ロキそこにいるのか？ ロキ、お願いだ、聞いてくれ」

「なんだ？」

「ナット二十八代目村長としての心得だ」

「お、おお」

「一、戦うのは正しきのため。二、戦うのは仲間のため三、戦うのは守るため……」

血を吐きながらもしゃべり続ける親を見て、ロキは辛くなった。

「もういい。もういいよ親父……」

ロキは父を抱きしめた。

「ロキ……お前は、生きろ。そして、戦……え」

「わかった。必ず仇を」

涙としゃくりで、これ以上喋れなかった。父はそこで、息絶えた。徐々に冷たくなっていく、父親に、ロキはキスをして、自分の服を、

父の顔にかけた。

「ありがとう……オヤジ」

道に転がる人々、殆どが顔見知りだった。その中にはベンさんの遺体もあった。

「ベンさん……ありがとうございました」

親しかった人に、別れを告げ、復讐のために、ロキは旅に出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9528h/>

漆黒蝶―ブラックバタフライー

2010年11月5日01時36分発行